

「私がやらなきゃ、誰がやるんだ。」

この半年もしないうちに、何百回この言葉を頭に浮かべたのだろう。一度頭に浮かんだだけでも、ぼかすと頭を殴られたような気分になる。それなのにこの言葉はもはや私の座右の銘にでもなったかのように、幾度となく私の脳裏をよぎる。繰り返し、繰り返しも無限ループだった。

今年の四月、私は緑化専門委員長に任命された。ずっと希望していた委員会だった。委員会をとおして大好きな植物と関わりたい。二年間追い続けてきた先輩たちのような「頼れる」、「かっこいい」先輩になりたい。全力を尽くしてこの委員会を支えたい。そんな純粋な気持ちで立候補した。任命してもらえてからは、志半ばだった人たちの分までさらに頑張っていこうと思った。委員会の顧問の先生に挨拶をしに行ったとき、

「やる気が素晴らしいね。」

と言ってもらえることができた。

「精一杯頑張ります。」

込み上げる嬉しさをかみしめながら答えた。

しかし、そんな思いとは裏腹に、私にとって委員長の仕事は思っていたよりもずっと厳しいものだった。委員さんのため、みんなのため、と思って常時活動の内容を放送からポスターの掲示に変更したのだが、それは私の負担が増えることを意味していた。ポスター作成のために各クラスに配布したプリントをまとめるのは自分の仕事になるし、期限を守らない委員さんのプリントを集めるため、各クラスを渡り歩くのも私の役割だった。

「これくらいなら大丈夫。」

「私がやらなきゃ、誰がやるんだ。」

自分に言い聞かせるように何回も頭の中でこの言葉を思い出していた。委員長を始めたときからずっと、委員さんの負担はなるべく減らしてあげたいと思っていたので、最初は苦でも何でもなかった。でも、だんだん疲れてきてしまい、「塵も積もれば山となる」ということわざの意味を痛感するようになった。大変だった。

たのは常時活動だけではない。並行して行う委員会の行事企画もあった。私が企画したのは、全校で雑学クイズをするというもの。賞状はもらって嬉しいとびきり豪華なものにしよう。たくさんのクラスに賞状を渡せるよう、制度を整えて、難易度の合った問題を作って、たくさんの休日をおこの企画のために費やした。「精一杯頑張ります。」

あのときのあの言葉に恥じない働きをしようという思いだけが私を支えていた。

問題だったのは、この企画の景品である賞状だった。植物をモチーフにして自らデザインしたこの賞状。一枚につき、色紙で作ったお花が三つと、葉が二枚ついている花束のような賞状。以前、

「企画でもらった賞状って忘れがちなんだよね。」

という意見を聞いたとき、じゃあ忘れられない賞状にしたらいいいと思い、企画を考えた当初から練り込んでいた要素だった。少しでも企画が楽しくなればそれでいい。今考えると、ずいぶん甘い考えだった。

賞状を初めて作ったのは、四月の最初の委員会の前だった。見本として、手作りで一枚作ったものだった。たった一枚作るのに、三時間かかった。作ったものを

初めて委員さんに見せたとき、「すごい」などと言ってもらえて、ただ嬉しかったのを覚えている。無事に賞状のデザインは決まったのだが、それから全く無事では済まなかった。

一枚三時間の賞状を全クラス分二十四枚。一枚につきお花は三つ。一つ目のお花は花びらが六枚で全クラスにすると百四十四枚、二つ目のお花は花びらが八枚で百九十二枚、三つ目のお花は花びらが十八枚で全クラス分は四百三十二枚である。見本はこれを手作りで作ってしまった。誰が作るのか。もちろん、

「私がやらなきゃ、誰がやるんだ。」

である。ここからはもう地獄道であった。顧問の先生方には頼みづらいうえに、相談するよりも先に私が一人で作ってしまった方が早く済むだろうと半ば諦めていたから誰かに頼ろうとは思わなかった。夜な夜な一人で色紙を切ったり貼ったりをずっと繰り返していた。

あるとき、その日の夜は塾があったので、放課後すぐに家で一人で作っていたときのことだった。

「どうやって作るの。」

母だった。私が、

「どうして。」

と聞いた。普段私のすることにあまり干渉しない母がどうしてこんなことを聞いたのか分からなかったからだ。すると母は表情を変えずに、

「手伝うんだよ、作り方教えて。」

と言った。私は最初、自分が「精一杯頑張ります」と言ってしまったのだから、ここは私一人でやらないとだめなのかもしれない。だから家族には頼ってはいけないだろうと思って、それを母に伝えた。すると、
「あなたはどうせ誰にも頼らないのだから、とりあえず私でも頼りなさい。」

と言って、私の背中をびしっと叩いた。

丸くなっていた私の背中がすっと伸びた。「頼りない」この言葉がどれだけ私の支えになったのか計り知れない。ずっと一人で抱えこんでいたということ自分を分のことながらそこで初めて気がついた。ずっと、私
がやらなきゃ、誰がやるんだと思っていたので、「それなら私が手伝う。」と言ってくれたことがとても嬉しかった。私は今抱えている問題のことを洗いざらい全て母に話した。テスト前なのに賞状をまだ作りきれないこと、お花がそれぞれ二十四本ずつ必要なこと、

他に頼ろうとしていた人なんて誰もいないことを。全て聞くと母は、

「もっと早く言いなさい。」

と言って、慣れない手つきで、お花作りを手伝ってくれた。叱るように言ったその台詞に心が温かくなるのを感じた。母はずっと私のことを心配してくれていたのだ。ずっと一人でやらなければいけないと思い、が
んじがらめになっていた私の心がするするとほどけていくようだった。自分から頼れる人がいなかったのではない。自分が誰も頼ろうとしなかったのだ。そのく
せに助けてくれる人が誰もいないと思い込んでしまっていた自分の身勝手さに腹が立ったのと同時に、私は
一人ではなかったのだという安心感を覚えた。二人で
作ると一人のときとは比べ物にならない速さでお花が
完成した。すべて完成したお花は並べると花束のよう
だった。花束を前に母は、

「頑張りがすぎはよくない。」

とだけ言って、台所に消えていった。

あのとき、母と作った花束の賞状は多くのクラスに掲示されている。私はそれを見るたびに、母の優しさ
とあの言葉を思い出す。ずっと自分が大切にしていた

言葉、

「私がやらなきゃ、誰がやるんだ。」

自分がやることももちろん大切なことだと思う。でも、この言葉は少し間違っていた気がする。頑張りすぎて自分を切り詰めていくうちに、何かが壊れてしまう。その前に、誰かに助けを求める勇氣も必要なんじゃないかと思う。「頼りなさい」と言ってくれた母も同じ気持ちだったのではないか。母はそんな気持ちになっ
ていた私に気づき、ずっと手を差し伸べてくれた。

私はその手に救われたし、助けてもらえてとても嬉しかった。だから、私もそんな手を差し伸べてあげられる人間になりたい。母のような辛いときいちばんに助けの手を差し伸べられる人に、この出来事とおして
憧れた。そんな母は、

「人を助けられる人間になるためには、自分から人を頼ることも必要なの。」

と言っていた。人を助けられる人は、頼られるだけでなく、頼ることもできる人だ。母のくれた花束のような大切な思いを胸に生きていきたいと思う。